

幸福度と海外就労意欲：台湾人のケース

蕭 涵文^a

要約

本調査では、オンラインでアンケート調査を実施し、台湾人の中でどのような人が日本で就労したいかについて検証する。選択型コンジョイント分析の結果、幸福度が低い台湾人は日本で働くことに抵抗を感じない一方、幸福度が中位もしくは高い台湾人は台湾で働くことよりも日本で働くことに抵抗を感じていることが確認された。こうした結果は、母国を離れて外国で働く背景には、何らかの理由により母国における幸福度が低い事実が存在することを示唆している。

JEL 分類番号： C25, J61

キーワード： 幸福度、外国人労働者、アンケート調査、海外就労意欲

1. イントロダクション

日本の外国人労働者は 2011 年の東日本大震災後にかけて一時減少傾向にあったが、そのあとは年々増加している。2019 年 165 万人となり、過去最高を更新した。在日外国人の割合は 2010 年の 1.66 から 2019 年の 2.32% になっている。2019 年 10 月の時点、国籍別にみると、中国が最も多く 418,327 人であり、外国人労働者数全体の 25.2% を占める。次いで、ベトナムが 401,326 人(24.2%)、フィリピンが 179,685 人(10.8%) の順となっている(金,2019)。

また、法務省の統計資料で 2017 年台湾人日本に仕事しに行く人は 8 千 3 百人となり、2016 年より 28% 増加し、過去 3 年 122% 増えてきた(法務省,2017)。その中で、女性と 21 歳～40 歳の割合は 68.46% と 51.78% と占めている。2014 年から就労ビザ持っている台湾人は年々 30% 以上増加している、一方、留学ビザ持っている人の成長率は 15%、14%、8% となる。つまり、近年、留学せずにそのまま仕事で来日台湾人が多くなっている(台湾行政院,2018)。

労働者人口の減少に伴って、今後も外国人労働者の増加が見込まれる。では、日本で働こうとする外国人はどのような特徴を持っているのだろうか？ 今後も多くの外国人労働者を受け入れるであろう日本にとっても日本に来る外国人労働者の特徴を知ることが重要である。本研究では、その特徴を分析し、外国人労働者が定着するには、どのような政策を実行すべきかを明らかにしたい。

^a 近畿大学大学院経済学研究科博士前期課程 2033110001@kindai.ac.jp

2. アンケート調査と分析結果

2.1 アンケート調査の概要

本調査では、オンラインでアンケート調査を実施し、外国人の中でどのような人が日本で就労したいかについて検証する。今回は、台湾人のケースを検証するため、台湾人を対象にアンケートを実施した。アンケートはSNS(PTTというサイト)の掲示板の上でアンケートを掲載し、回答期間は7月15日から8月15日である。アンケートは、265件の回答があった。アンケート回答者の属性は、表1に示されている。

本研究では、選択型コンジョイント分析によって、架空の企業のプロフィールを提示して、そのうちのどちらの企業に就職したいかについて回答者に回答してもらうことにより、ある企業へ就職した場合の回答者の効用に影響を与える要因について分析する。架空の企業のプロフィールとして、本研究では、企業の年収、その企業に勤務した場合に家族と会える頻度、仕事のやりがい、勤務地の各属性を考慮した。そのうえで企業の年収については、250万円、450万円、600万円、家族と会う頻度については、3回、6回、12回、仕事のやり甲斐については、なし、普通、あり、勤務地については、日本、台湾という水準を設定した。直交表を用いて、これら4つの属性と3つもしくは2つの水準様々に変化させ、18個の企業プロフィールを作成した。今回は、これら18個のプロフィールを2つずつ提示し、9個の質問の中でどちらの会社に就職したいかについて回答者に答えてもらった。各質問とその質問における企業プロフィール、および回答者の回答数は表2に示されている。

表1 アンケートの質問、選択肢と回答数

質問	選択肢	回答数	構成比
1.性別	男性	121	45.7%
	女性	144	54.3%
2.年齢	20代	169	63.8%
	30代	87	32.8%
	40代	5	1.9%
	50代	4	1.5%
3.現在の勤務地	日本	135	50.9%
	台湾	126	47.5%
	中国	2	0.8%
	香港	0	0%
	その他	2	0.8%
4.現在の幸福度	0	1	0.4%
	1	3	1.1%
	2	7	2.6%
	3	9	3.4%

	4	12	4.6%
	5	44	16.6%
	6	57	21.5%
	7	61	23.1%
	8	48	18.1%
	9	16	6%
	10	7	2.6%

2.2 分析結果

アンケートで得られた回答に基づき、条件付きロジットモデルにより、回答者のある企業に勤務した場合の効用を以下の式で分析する。

$$Y = \beta_1[\text{年収}] + \beta_2[\text{家族と会う頻度}] + \beta_3[\text{やり甲斐なしダミー}] + \beta_4[\text{やり甲斐良いダミー}] + \beta_5[\text{勤務地日本ダミー}] + u$$

ここで、Yはある仕事を選んだ場合の効用、uは観察不可能な誤差項である。上記の式を回答者全員分のデータを使って条件付きロジットモデルで推定した結果が表 3 に示されている。

表 3 全体の分析結果

説明変数	係数	P 値	限界支払い意思額
年収	0.0102467	0.000	
家族と会う頻度	0.0481595	0.000	4.700000098
やり甲斐なしダミー	-0.5585321	0.000	54.5084857
やり甲斐良いダミー	0.641485	0.000	62.6040579
勤務地—日本ダミー	-0.6752113	0.000	-65.8954883
Observations	4608		
Pseudo R2	0.3254		

全体の推定結果から言えることは以下の通りである。年収の係数は正で有意である。年収が高い仕事を選んだ時ほど効用が高い。家族と会う頻度も正で有意である。つまり、家族と頻繁に会うことができる仕事を選んだ場合、効用が高くなる。やりがいなしダミーは負で有意であり、やりがいありダミーは正で有意である。従って、やりがいがある普通の仕事よりもやりがいがない仕事を選んだ場合は効用が低下し、やりがいがある普通の仕事よりもやりがいがある仕事を選んだ場合の効用は高くなる。最後に、勤務地日本ダミーは負で有意である。つまり、台湾での仕事よりも日本での仕事を選んだ場合の効用は低くなる事が分かる。

表 4 は、幸福度が低い(幸福度か 0~4)回答者で推定を行った結果である。年収は正で有意であるが、家族と会う頻度は有意ではない。つまり、家族と会う頻度の多さはこれら回答者の仕事を選ぶ上での効用水準に影響はない。また、やりがいなしダミーも有意ではない。このことは、やりがいがない仕事を選んでも効用水準は低下しない。また、やりがい良いダミーは、正で有意である。このことは、やりがいが良い仕事を選んだ場合の効用は高くなる。最後に勤務地日本ダミーは有意ではない。つまり、台湾で働く場合でも日本で働く場合でも効用水準に違いはない。

表 4 幸福度が低い回答者の推定結果

説明変数	幸福度一低		
	係数	P 値	限界支払い意思額
年収	0.00924	0.000	
家族と会う頻度	0.0294558	0.293	3.18785714
やり甲斐なしダミー	-0.4584413	0.065	-49.6148593
やり甲斐良いダミー	0.8177211	0.001	88.4979545
勤務地—日本ダミー	-0.2842418	0.177	-30.7620996
Observation	558		
Pseudo R2	0.2906		

表 5 は、幸福度が中程度の回答者(幸福度が 5~7)のみで推定を行った結果である。年収は有意である。年収が高い仕事を選んだ時ほど効用が高い。家族と会う頻度は正で有意である。つまり、家族と頻繁に会うことができる仕事を選んだ場合、効用が高くなる。また、やりがいなしダミーは負で有意であり、やりがいありダミーは正で有意である。従って、やりがいがある普通の仕事よりもやりがいがない仕事を選んだ場合は効用が低下し、やりがいがある普通の仕事よりもやりがいがある仕事を選んだ場合の効用は高くなる。最後に、勤務地日本ダミーは負で有意である。つまり、台湾で働くことよりも日本で働くことは効用水準を低下させる。

表 5 幸福度が中程度の回答者の推定結果

説明変数	幸福度一中		
	係数	P 値	限界支払い意思額
年収	0.0107942	0.000	
家族と会う頻度	0.0473873	0.000	4.39007059
やり甲斐なしダミー	-0.6060632	0.000	-56.147116
やり甲斐良いダミー	0.6622743	0.000	61.3546442
勤務地—日本ダミー	-0.7874877	0.000	-72.9547072
Observation	2825		
Pseudo R2	0.3476		

表 6 は、幸福度が高い回答者(幸福度が 8~10)までの回答者のみで推定を行った結果である。年収は正で有意であるが、家族と会う頻度も有意である。つまり、年収が高いほど、家族と会える頻度が多いほど効用が高くなる。また、やりがいなしダミーは負で有意であり、やりがいありダミーは正で有意である。従って、やりがいがある普通の仕事よりもやりがいがない仕事を選んだ場合は効用が低下し、やりがいがある普通の仕事よりもやりがいがある仕事を選んだ場合の効用は高くなる。勤務地日本ダミーは負で有意である。つまり、台湾で働くことよりも日本で働くことは効用水準を低下させる。

表 6 幸福度が高い回答者の推定結果

説明変数	幸福度一高		
	係数	P 値	限界支払い意思額
年収	0.0095339	0.000	
家族と会う頻度	0.0576354	0.029	6.04531199
やり甲斐なしダミー	-0.5102204	0.001	-53.5164413
やり甲斐良いダミー	0.5090621	0.002	53.3949486
勤務地—日本ダミー	-0.6048409	0.001	-63.4410787
Observation	1206		
Pseudo R2	0.2949		

以上の分析より、幸福度が低いグループは日本で働くことに抵抗を感じてはいない。一方、幸福度が中位のグループおよび幸福度が高いグループの回答者は、台湾で働くことに比べて日本で働くことに抵抗を感じていると解釈することができる。母国を離れて外国で働く背景には、何らかの理由により母国における幸福度が低い事実が関係していることを示唆している。商業週刊(2017)では、台湾人来日の要因について調査し、「日本と台湾に生活の違い」というアンケートを実施した。「多様なレジャーがあって台湾より豊かな生活過ごせ

ることはできる」「海外生活で特別な経験を得ることができる」を選択した回答者が最も多い。この調査結果とこのアンケートによると、幸福度が低いグループは母国の生活を飽き、幸福感じられないので、今より豊富な娯楽で生活を送るによって、幸福を上げると考えられる。

今後、日本においては、労働人口の減少とともに、外国人労働者の更なる受け入れが必要になると考えられる。そうした中、母国における幸福度が低いほど日本で働く傾向があるということは彼らは日本に生活することによって幸福度を上げることができると期待していることを意味している。一方、「日本語能力不足」、「転職することが難しい」、「外国人労働者差別」そういった現在在日台湾人に困ることもある。今後、多くより外国人材を誘致するため、医療、生活、年金などの面でサポート体制を整備することが必要である。例えば、企業から日本語教育強化の制度を設ける、外国人受診しやすい医療機関の設立等々。世界中、高く平等な医療環境や外国人労働者のため日本語教育支援、より良く外国人のためのサポート制度改編することが大切となっている。

3. まとめ

今回の分析では、幸福度が低いグループの回答者ほど日本で働くことに抵抗がないことが分かった。今後、日本においては、外国人労働者が増加することが考えられる。現状では、労働条件が厳しい業種や仕事が多いので外国人労働者に安心して働ける環境を作る必要がある。母国より厳しい労働環境を感じさせると幸福度は低下してしまうため、これからより多くの外国人労働者を受け入れることは難しくなる。様々な政策、法律の面で外国人労働者にとっての労働環境、労働制度、その他の様々なサポートを改善し、幸福度が高いと感じさせるのは重要な課題だと考えられる。

引用文献

台湾行政院主計總處, 2018. 「107 年國人赴海外工作人數統計局結果」

<https://www.stat.gov.tw/ct.asp?xItem=44935&ctNode=6395&mp=4>

金 明中, 2019. 「日本における外国人労働者受け入れの現状と今後の課題」(2019,11)

法務省, 2017. 「在留外国人統計 (旧登録外国人統計)」(2017,12)

商業週刊, 2017. 『最大の優點不是薪資跟福利...800 位「在日工作台灣人」, 告訴你去日本工作為何吸引人?』(2017,08)